

吃音（きつおん）のはなし

— 周囲の理解が重要です —

小山内 筆子¹⁾

【はじめに】

吃音は、発話時に音を繰り返す、引き伸ばす、つまる（ブロック）などの言語症状がみられ、流暢に話すことができない言語障がいである（図1）。吃音は、以前「どもり」と言われていたが、この言葉は差別用語とされ、現在は公には使われていない。

吃音の問題は言語症状にとどまらず、二次的症狀として心理面や対人関係の問題に発展する可能性がある。

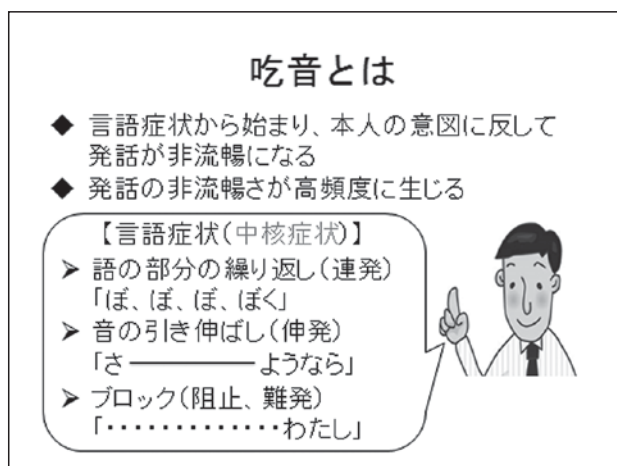


図1 吃音とは

特に成人吃音（中学生以上を成人吃音として扱う）では、就職活動や就労において深刻な問題となっている。吃音者でつくる全国言友会における飯村ら（2014）の調査によると、「吃音のために仕事についてから苦労した」と回答した人は約8割であり、中には離職に追い込まれ、引きこもりになる人もいた¹⁾。また、2013年11月28日の北海道新聞朝刊の記事には、吃音を苦に自死した青年の記事が掲載された²⁾。その記事には、職場に吃音のことを説明しても理解してもらえず、「人知れず苦悩、命絶つ」とあり、悩みの深刻さが綴られていた。記事の最後には自死した家族の願いとして、「吃音を理解しても

らえる世の中になってほしい」と訴えていた。

親にも恋人にも吃音を打ち明けられず、吃音を隠している吃音者や世界中で自分ひとりが吃音だと思っている吃音者は意外に多い。吃音の問題は個人の問題としてではなく、社会全体で取り組むべき課題である。

【吃音の発生】

(1) 発症率・有病率

吃音の発症率は約5%程度^{3,4)}、吃音の有病率は言語や地域、国を問わず人口の約1%程度である⁵⁾。男女比はほぼ3対1で男性に多いとされている⁶⁾。

(2) 発吃・自然治癒

吃音の言語症状が起り始めることを「発吃」という。吃音のある子どもの多くが、多語文で話すようになる2歳代以降に発吃する。吃音の発吃年齢はほとんどが幼児期に集中しており、特に2歳～5歳であると言われている^{3,5)}。

自然治癒とは、特別な指導を受けずに吃音が自然に消失することである。最近の研究では、幼児期に発吃した吃音の子どもの約7～8割程度が自然治癒するとされ⁶⁾、幼児期に吃音がみられても、高い割合で改善・消失している。

【吃音の原因】

吃音の原因はいまだ不明であるが、吃音の発症には多くの要因が関与すると考えられている（図2）。

【吃音の変動】

吃音の現れ方は一様ではない。吃音には以下のような現象がみられる。

・独り言や囁き声、動物や赤ちゃんに話しかける場面で

1) 弘前医療福祉大学保健学部医療技術学科 言語聴覚学専攻

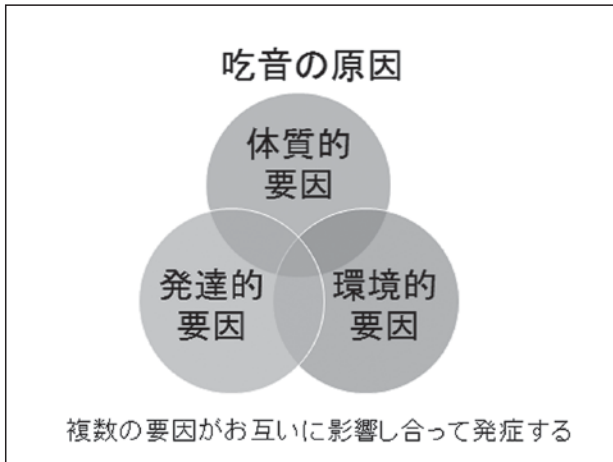


図2 吃音の原因

は吃音は起こらない。

- 他者と一緒に声を揃えて読む斉読や歌をうたう時には吃音は改善される。
- 吃音には波があり、比較的流暢に話せるときとそうでないときがある。改善されたと思っても、しばらくすると、ぶり返しがみられる。

【いじめ・からかい】

吃音の人は言わなければわからないことから、周囲から理解されず、二次的障がいが発展しやすい（いじめ、からかい）。二次的障がいによって「生きにくさ」を感じている人が多い（図3）⁷⁾。

**意外と軽視されている
いじめ・からかい**

□いじめ・からかい

①真似する
②指摘する
③笑う

□もし、吃音の子どもがからかわれたり、いじめられても、だまっていたとするなら、対応の仕方を教わっていなかったからです。

□真似をする子どもが悪いのではないのです。周囲の大人にも責任があります。（だから、吃音に対する正しい知識が必要なのです。）

図3 いじめ・からかい

【吃音に対する偏見や誤解】

- Q 1 愛情不足や叱りすぎたことが原因で吃音になるのか？
- 愛情不足やストレスという曖昧なもので吃音が発症すると断定できない。親のせいではない。中国では

一人っ子政策を行って吃音が減ったという報告はない。

- Q 2 吃音を真似するとうつるのか？
- 吃音の真似をしてうつることはない。
- Q 3 吃音は遺伝するのか？
- 遺伝は一つの要因として考えられるが、一卵性双生児に不一致例が多く見られることから環境要因も関与している可能性がある。
 - 遺伝するのは吃音そのものではなく「吃音になりやすい体質」であり、体質の遺伝には多くの遺伝子がかかわっている。
- Q 4 吃音を意識させないと治るのか？
- 吃音に対する自覚に関して、Boeyら（2009）は、5歳では80%の子どもが自覚していると述べていることから⁸⁾、「意識させないように」と言う指導は、適切とは言えない。
 - 吃音の子どもから、「なんで、うまく話せないの」「どうして、こんな話し方なの」と聞かれることがある。子どもの質問に対して、無視することで「聞いてはいけない質問だった」と勘違いすることもあり得る。

【吃音の人への適切な対応と不適切な対応】

1) 吃音の人への適切な対応

話し終わるまで待つことが基本になる。吃音者が話し終わった後に、聞き手が話してくれたことばを復唱する。復唱することで「吃音の人が自分の話したことばが伝わった」と安心することに繋がる。

2) 吃音の人への不適切な対応

周囲の人はよかれと思って、言ってしまいがちなことばを、以下に記す。

- はっきり言いなさい
- 落ち着いて
- ゆっくり言えば大丈夫
- 頑張ればできる
- 今日はどうもならないね（話す内容より、話し方の表面的側面で判断される）
- あなたの吃音は軽いから、気にしなくていいよ

【おわりに】

吃音は人類がことばを使うようになって以来の悩みであるといわれるように、奥の深い重い課題である。吃音をもつ人が生活の中でたびたび不安な思いを抱くことがある。幼児期からの不要なからかいはじめを予防し、周囲の関わる人の吃音に対する正しい理解をすることで

二次的問題は軽減できる。一番近くにいる人として、吃音の人の話しに耳を傾け、共に支え合い、共に生きる社会が必要である。

文献

- 1) 飯村大智, 池田邦彦: 吃音者の職業・生活実態調査—全言連の職業データベースからの報告—。日本吃音・流暢性障害学会, 第2回大会資料, 2014.
- 2) 北海道新聞, 2013年11月28日朝刊「吃音の今—もどかしさを抱えて—」
- 3) Andrews G, Crai A, Feyer A, et al: A review of research findings and theories circa 1982, *Journal of Speech and Hearing Disorders*, 48: 226-246, 1983.
- 4) Mansson H: Childhood stuttering, Incidence and development. *Journal of Fluency Disorders*, 25: 47-57, 2000.
- 5) Bloodstein O, Ratner N: *A Handbook on Stuttering*, 6th Edition, Clifton Park, New York, Thomson Delmar Learning, 2008.
- 6) バリー・ギター: 吃音の基礎と臨床—総合的アプローチ—(長澤泰子監訳), 学苑社, 東京, 18-22頁, 2007.
- 7) 菊池良和: 備えあれば憂いなし—吃音のリスクマネジメント—, 学苑社, 2014.
- 8) Boey R, Van de Heyning P, Wuyts F, et al: Awareness and reactions of young stuttering children aged 2-7 years old towards their speech disfluency. *Journal of communication disorders*, 42(5): 334-346, 2009.